

会 師 医 市 牧 小 苦
師 医
基 憲
田 吉

へ方むしな酒をた

昔から、お酒は適量なら疲れを取り、食欲を増すなど、百薬の長といわれますが、飲みすぎると二日酔いとなり、私たちを苦しめる結果となります。今日、いやおうなしにストレスがたまる社会情勢で、お酒をたしなむ人が増えておりますが、それにつれアルコールにまつわる疾患も増えております。

最近、全医療費の二割がアル

毎日飲む人は適量を守って

コール性疾患に関係するという報告もあるほどです。実際、職場の健康診断においても、アルコール性肝炎と思われる人が四十代くらいから目立つようになっています。アルコール(酒)を毎日十五年から二十年多量に飲み続けると、肝臓はアルコール性肝炎、肝硬変に移行すると言われています。また、脳も萎(い)縮してほげ症状を早期に呈する

こともあります。これらが四十年代から発病することが多く、中年期の成人病と相まって肉体的、精神的にも、さらに、社会的にも苦しまなければならぬ人が出ております。

アルコール性肝炎は、アルコール量で毎日七十五㏄―百㏄以上十五年から二十年以上飲んでゐる人(清酒三合、しょうちゅう二合、ビール大瓶三本、ウイ

スキーダブル三杯以上のいずれか)に発症してくるといわれています。この量は決して酒の強い方の一日量ではなく、普通一般人の人がチャンポンにしてたしなむ量であることが肝心であります。

酒を飲んですぐ赤面するとか、病院で注射するときアルコール塗布部が発赤するような人が、さらに少ない量を毎日飲んで

いても、前記の年数よりも早くアルコール疾患を発生します。アルコールが体内で分解されると一時、アセトアルデヒドという物質が作られますが、この物質が肝細胞膜の脂質と結びつき、これを自身の免疫が異物と判断し、免疫などの作用により肝障害が出現します。こうならないためには、毎日飲む人は二十歳くらいから(清酒一合、しょうちゅう一合、ビール大瓶一本、ウイスキーダブル一杯のいずれか)適量を守って毎日飲むようにした方が良いでしょう。

既にアルコール性肝炎を発症してしまっている方は、酒が入るとすぐ肝障害が発生しますので、原則的に禁酒すべきですが、どうしても付き合いで酒が入る場合、一日の酒の適量と「休肝日」を意識する必要があります。アルコール性肝炎が発症してから酒を飲み続けるとアルコール性肝硬変に移行します。

お酒をたしなむ方へ

これは、ほかのウィルス性肝炎の肝硬変と違って肝機能検査上、肝硬変と分かりにくい一面をもっております。さらに、肝硬変から肝がんの発生もあります。最近、アルコール性肝炎、肝硬変の患者さんにC型肝炎の合併が増えており、そのために肝がんの発生が一層高まっていると報告されています。そうならないためには、一歩立ち止まって人生を長い目で見ることも必要なんでしょうが、あなたはどうか判断されますか？。

お問合せは、苦小牧市医師会

電話 33-4720へ